

展示品一覧

次の大図4鋪は、第4次測量までの成果をまとめたものであり、文化元年8月1日に幕府に提出し、9月6日に將軍家齊の上覧を受けた「日本東半部沿海地図」の伊能家控図である。

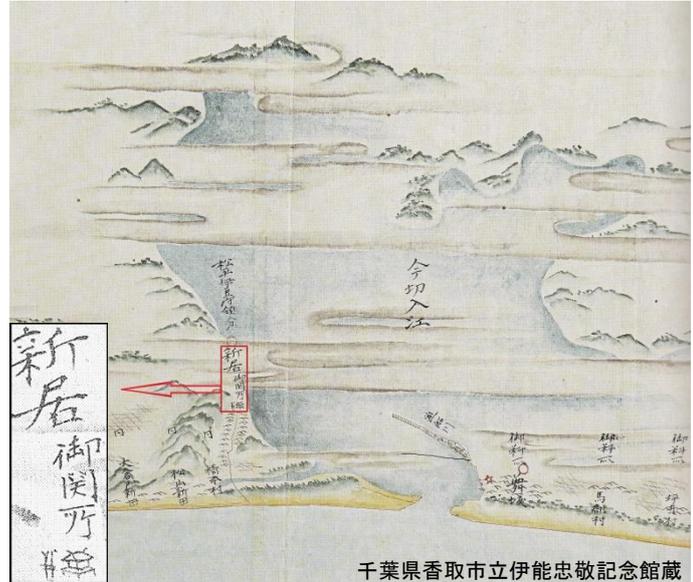
○ 大図（静岡県西部）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第七〈自成行／至小松原〉」

国宝：地図・絵図類 番号21、文化元年、縮尺36,000分の1

第4次測量で、享和3（1803）年3月21日に成行村（静岡県掛川市）を出立してから、28日の小松原村（愛知県豊橋市）までの測量成果であり、主に静岡県西半が描かれている。ただし、この大図は「海浜浪打際通り」（『測量日記』享和3年3月24日）を測量したものであるため、遠州灘の単調な海岸線の測線とそこから浜松城下などに向って測線が延びているだけで、東海道は描かれていない。また浜名湖岸も測量していないので、浜名湖北半や気賀街道のあたりは大和絵特有の「すやり霞」で処理されている。

浜名湖の西岸には新居関所（今切関所）の門や建物が描かれている。新居関は唯一現存する関所として特別史跡の指定を受けている



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

○ 大図（渥美半島・知多半島）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第八〈自小松原／至上野間〉」

国宝：地図・絵図類 番号22、文化元年、縮尺36,000分の1

享和3年3月28日の小松原村から4月29日の上野間村（愛知県知多郡美浜町）までの海岸測量の成果であり、主に渥美半島、三河湾周辺、知多半島南部が描かれている。この大図には接合するための切り込みが入っている。目を引くのは、三河湾奥に突出した砂嘴「水中洲」である。この地域については、『会報』第69号の「伊能図の旅」に、星埜由尚氏による詳細な解説がある。



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

○ 大図（知多半島北半～名古屋～木曾川下流）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第九〈自上野間／至起〉」

国宝：地図・絵図類 番号23、文化元年、縮尺36,000分の1

享和3年5月14日に起宿（愛知県一宮市）到着するまでの測量の成果であり、知多半島の北半の両岸と伊勢湾奥、熱田、名古屋等が描かれている。4月29日と5月1日に宿泊したのが小鈴ヶ谷村の「止宿酒造人にて盛田久左衛門」である。ソニーの創業者・盛田昭夫の実家である。『会報』第83号所収の柏木隆雄氏の「忠敬が宿とした盛田久左衛門家」を参照されたい。

5月6日には「五ッ頃熱田宿出立。量程車にて測る。四ッ頃に名護屋城下玉屋に着」とあり、小田原、駿府、金沢とともに量程車を使用した例である。



アメリカ大図 第115号

○ 大図（大垣・関ヶ原・伊部・木之本）

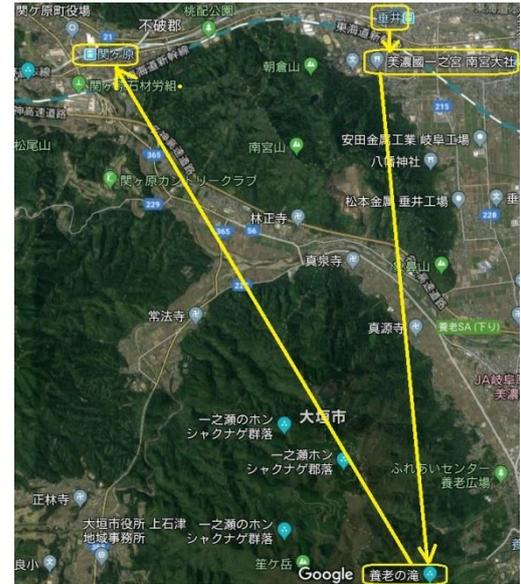
「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第十〈自起／至木本〉」

国宝：地図・絵図類 番号24、文化元年、縮尺36,000分の1

享和3年5月24日に木本宿（滋賀県長浜市木ノ本）に到着するまでの測量の成果である。関ヶ原から北国脇往還を通過して、春照宿、伊部宿、木之本宿を経て敦賀から加賀測量へと向った。琵琶湖岸の測量は第5次測量時のため、この大図には琵琶湖は描かれていない。

『測量日記』の享和3年5月18日の記事によると、忠敬は従者の伊能吉兵衛を連れて測量隊から離れて、垂井宿から美濃国一宮の南宮大社を参詣した。さらに南下し養老滝を見物してから、関ヶ原に向かい測量隊と合流した。なお、大図には「南宮明神」はあるが養老の滝は描かれていない。

北国脇往還の伊部宿、木之本宿については、『会報』82号の拙稿「伊能探訪 - 若狭・北近江の旅 -」で紹介した。



○ 小区域下図（浜名湖東岸～左鳴湖）

「自遠江国敷知郡舞阪宿至遠江国敷知郡白須村下図」

国宝：地図・絵図類 番号207

文化2年、縮尺36,000分の1、51.6×47.4cm

文化2年3月18日から20日までの第5次測量の結果をまとめた小区域下図である。「今切湖水 従舞坂駅至白須村 第一通 計四枚」と墨書があるので、4枚1組で浜名湖全体をカバーしているのであろうか。

この下図では始点の「舞坂渡船場」と終点の「白須（洲・須力）受泉庵門前」の2地点について右図のように朱線で縦軸と横軸が引かれ、大図上の距離が記されている。横軸には「東へ一寸〇二厘（約31mm）」、縦軸には「北江（へ）五寸一分五厘五毛（約156mm）」と墨書されている。「舞坂渡船場」と「釜（篠力）原村」の2地点についても縦軸と横軸が墨書され、その東西方向の長さが「西四寸八厘五毛（約124mm）東」、南北方向が「七分一厘八毛（約22mm）」と大図上の距離が記されている。

左鳴湖は測量日記によると東岸と西岸を18日と19日に分けて測量している。この下図では、閉じるはずの測線が左鳴湖の南西端でわずかに離れている。それぞれの測線の末端には「〇合」の文字が記されている。どのように繋ぎ合せたのだろうか。



○ 小区域下図（浜名湖西岸・新居関）

「自遠江国敷知郡橋本村至遠江国敷知郡新居宿下図」

国宝：地図・絵図類 番号209

文化2年、縮尺36,000分の1、33.0×47.6cm

文化2年3月28日の測量の結果の一部をまとめた小区域下図であるが、「浜名湖東岸～左鳴湖」の下図に較べて、描かれているのはかなり狭い範囲である。「今切ノ第三」と墨書されているとのことであるから、今切地区の小区域図の一部分を構成するものか。下図には極細字で「此石垣松梵天」と記入され、また「家角」からは四本の交会線が伸びている。「新居打止」から朱色の方位線が引かれ、「此朱線之方位 [?]西一一三〇ニ当ル」と注記されている。



アメリカ大図第111号

○ 「携帯用磁石」 国宝：器具類 番号50

千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

携帯用磁石で木製の台に着脱可能な真鍮製の方位盤がはめ込まれている。方位盤には十二支が刻まれている。



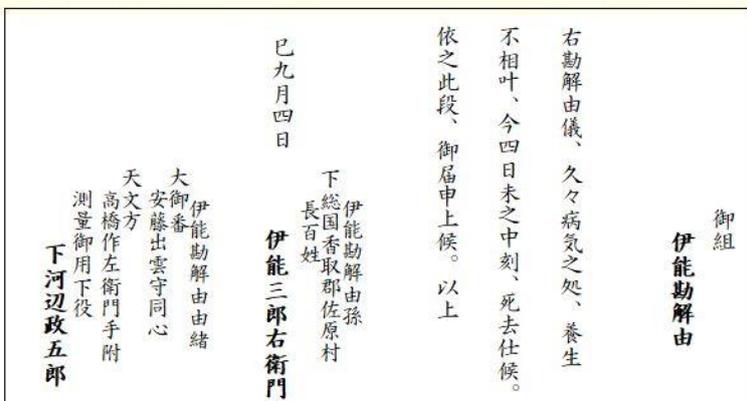
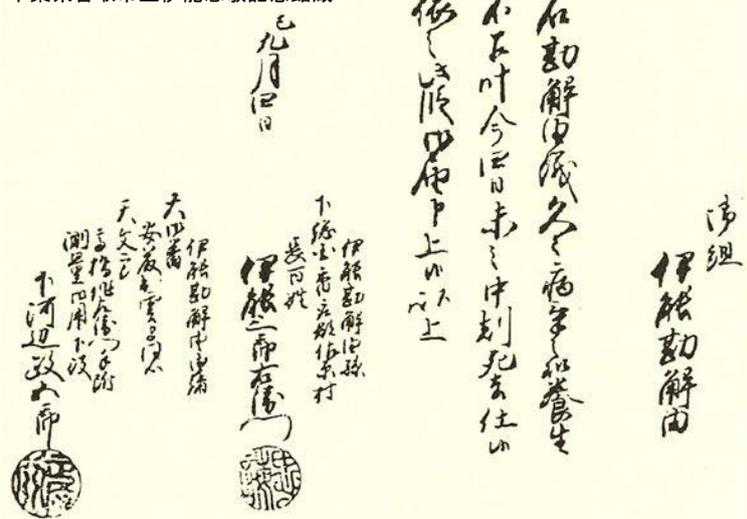
○ 「伊能勘解由病死届」

国宝：文書・記録類 番号381

伊能忠敬が亡くなった4年後、大日本沿海輿地図の完成と幕府上呈をまってその死が公表された。その手続きは、

- ・文政4年8月に所属小普請組組頭の渋江新之助に宛てて忠敬の名前で「当春以来、痰咳差発り、相勝れ申さず候」と病状報告と跡目相続の希望を提出した。
- ・9月には、「此節絶食に罷り成り」と病状悪化を報告。
- ・9月4日に右の「伊能勘解由病死届」を提出。忠敬の孫の忠誨が佐原村長百姓伊能三郎右衛門として、天文方の下河辺政五郎と連名で提出した。なお、記念館には他に3通の「伊能勘解由病死届」が残されている。日時が空白であり、届出日を決める前段階での下書きである。

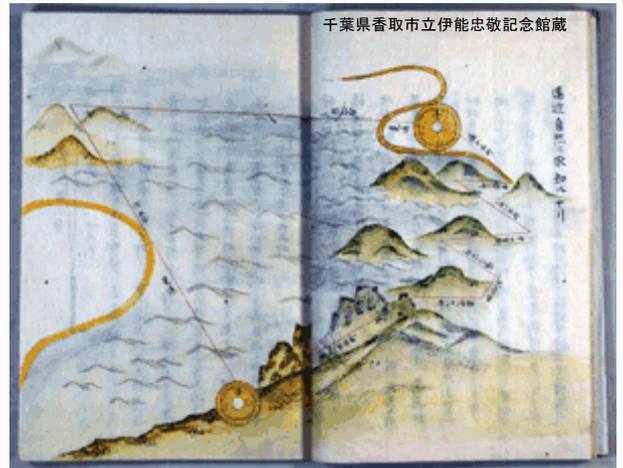
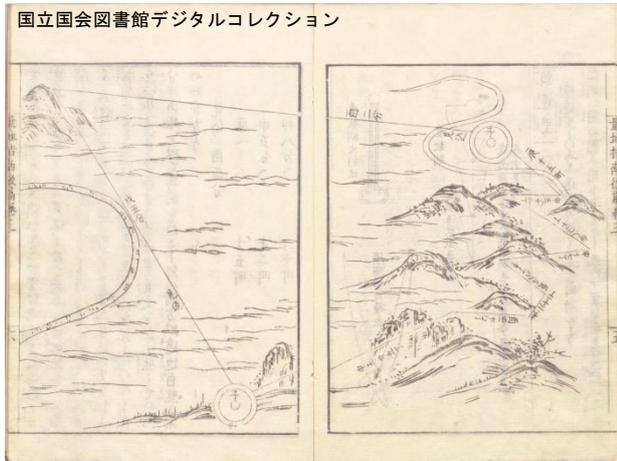
千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵



○「量地指南後編稿卷之二～五」(写本)

国宝：文書・記録類 番号376～379

伊勢の兵法家・測量家である村井昌弘が宝暦4年(1754)に江戸時代前半の測量術を集大成した『量地指南後編』を公刊した。展示品は伊能忠敬がこの刊本を書き写した写本である。



左側の『量地指南後編』の刊本を、伊能忠敬が書き写して右側の写本を作った

○「乙丑丙寅沿海日記 貞」

国宝：文書・記録類 番号78

文化3年11月2日から4日にかけての第5次測量の帰路の測量日記である。2日には木曾川沿いの起宿(愛知県一宮市起)を出発し、伊能隊と坂部隊に手分けして清洲まで測量。3日は名古屋城下の町通りを測量して熱田で止宿。4日は測量せずに東海道を岡崎城下まで進んだ。

